

---

FLY

IT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FLY

### 【Nコード】

N61140

### 【作者名】

IT

### 【あらすじ】

「このままじゃ、収集つかないけど、どうするの？ なんとかない。」

両肩に翼を生やした少女に、少年はため息混じりに答える。

「はいはい、わかったよ、サーシャ様。でも、ほんと、どうするんだろうかな？」

少女がいらだち、少年の頭を小突く。

少女の頭を悩ませていたのは、このあらすじについてだ。

「あらすじって何書くのよ。わけわかんない。」

「俺もわけわかんねーよ。」

少年はぶっきら棒に答える。

「あんたは奴隷なんだから、あんたが、あらすじをなんとかしなさいよ、この馬鹿レント。これは命令よ！」

中空に舞う少女は、体勢を変え、回転しながら勢いをつける。

そのままレントと呼ばれた少年に飛び掛る。

少年の腕をつかみ、立ち関節をくわえる。柔道で言うところの、いわゆる、脇固め。腕の関節を極められた少年は叫びながら言う。

「ちょっと、サーシャ、痛いつて。そもそもあんた、空飛んで体勢を変えて勢いまでつけたのに、何故に打撃じゃなく、関節技？ ちよっと、ストップ、折れる、折れる。」

「打撃ばかりは飽きたの。とりあえずお腹すいたー。」

作者がつぶやいた。

「マジであらすじとか訳わかんねー。これが一番難しいぞ。」

ってことで、

一言で言つと、

天界から落ちてきた間抜けで高飛車な天使が少年と暮らした日々の、短い出来事。少年と少女のほのかなラブストーリーのそれだけのお

話。

そんなに長くありませんです。

あなたの10分〜20分をいただき、読んでいただければ、これ幸  
い。

少女は、羽を広げた。

向かう先は天高くそびえる塔。

塔はなめらかなフォルムで、

掴まるような突起物はない。

塔の先は見えない。

雲ひとつ無い空に、塔は一筋に伸びていく。

少女は飛びたつ。空の彼方へ。

青空にどこまでも続く、塔の先、その先へ。

少女は上昇を重ねる。

既に地上へは数百メートルを数えるだろうか。

もう、後戻りはできない。

後は、体力が無くなるか、塔の先まで上昇するか。

それだけだった。

ある日、少年は落下した天使を見つけた。金髪のツインテールの非常に美しい少女だった。肌は透き通るほどに白く、青色の目。年のころは12、3か。少年とほとんど同じ年頃だ。羽は血にまみれ、天使というには不釣り合いな、妙に生々しい姿だった。少女は気を失っていた。

少年の街では、天使は高く売れる。金持ちの歪んだ性欲を満たすことが主用途だ。少年は喜んだ。これで、これから先数年の家計を気にしないで済むと。

小遣い稼ぎで冬の森に狩に出たが、非常に幸運だった。天然の天使

なぞ、数十年に一度出あうかいなかの幸運だ。

「ん……」

少女は気がついたようだ。

捕獲用の縄を用意した少年を少女の視線が射抜く。

想定外の少女の復活に、少年は狼狽した。

天使は、大体の場合において、少年の村から、天気の良い日には見える地平線に垂直に立つ細い棒のようなもの。聞いた話であれば、それは巨大な高い塔らしい。その塔の上にあるという、大地から不慮の事故により落下する、というのが常だ。

彼女達は落下を避ける行動をとるが、ギリギリのラインで運よく落下を回避するもの。又は落下のダメージで、羽にダメージを負う者に別れる。

彼女は後者のようで、片翼をしこたま落下の際に、落下地点の木に打ち付けられたようだ。近くには、折れた木の枝が見える。

「まあ、悪いようにはしない。痛い目にはあいたくないだろう。」

と、少年は悪びれた。肩は、わずかに震えていた。少年にとっては、初めての太捕り物だ。

「まあ、縄を持ってるだけで、あんたの気持ちは分かったわ。

要するに、私をとっ捕まえて売り飛ばそうって算段でしょ？これだから下界の人間は……」

少年は腰帯びた短刀を出した。

「まあ、そういうことだ、残念だったな」

精一杯の虚勢を張ったが、少女が笑う。

「あんた、刃の向け方、無茶苦茶よ？」

みると、短刀の刃のついた部分は少年に向けられている。

あわてて、少年は短刀を持ち直す。

「おまえ、それ以上笑うと、ぶち殺すぞ？」

少女は肩をすくめた。

「下界の下賤の民が、私を何とかしようなんざ、100年早いだよ。」

「

そういうと、突然、周りの藪がガサガサという音を立てた。

突然の血の臭いで、目を覚ました冬眠中の熊であろうか。冬眠中の熊の脇腹は脂肪分を費消しており、胴体部分は熊のイメージから離れ、ほっそりとしていた。

起き掛けに強烈な空腹を覚えた熊の眼前には、久しぶりの獲物が2体も転がっている。熊の顔がにやけたように見え、数瞬後、よだれを垂れ流した熊の口が開かれ、叫び声があげられた。

「グオオオオオオオオオオ」

森全体がゆれるような轟音。びりびりと大気が震える。

少年は動かない、否、動けなかった。

この時期は熊は冬眠中という祖父の話をまともに鵜呑みした自分が悪かったと考えていた。

身がすくみ、動けない。

少女は自分の羽をゆつくりと動かし、左右、ある程度 of 自由が利くことを理解すると、少年に問いかける。

「あんた、助けて欲しい？一個だけ、条件があるけど。」

「何言つてんだよ！俺はお前を狩るんだ！」

「そ、じゃあね！」

そういつて、少女は羽を2、3回羽ばたかせると、宙に舞った。

少女という獲物を逃した熊は、少年に向かって突進する。

「待て待て、俺が悪かった、ストップ、助けて！」

少年が叫び声をあげる。

「その代わり、しばらくの間、あんたは、私の奴隷よ？」と、少女が問う。

「もうなんでもいい、早く、助けて！」

少年は駆ける、熊から逃れようと。熊の速度は人間の比ではない。当初あった数十メートルという距離は瞬時に縮まり、熊の爪が少年を襲う。

少年は、つんのめりになって転がり、それが幸いし、何とか爪をかいくぐった。

その時、少女は少年の体を中空からさらった。

少年の住む街には、クラッチ教という信仰が主に信じられている。クラッチ教の伝承によると、人間は、遠い昔、楽園。つまりは塔の上に広がると言われる大地に住んでいた。

当時は人間にも天使と同じように羽が生えていたということだ。怠惰と享樂を繰り返す人間に怒りを感じた神は、楽園に厄災を振りまいた。

その時、楽園の政治機構の上層部が、多数の人間を楽園から追放し、人柱として神にささげ、神に許しを請い、要求は受諾された。



楽園を追放された人間達は、神の祝福から見放され、羽を失い、地上に降りた。野生動物と飢餓が蔓延する地上に。

そして、いつか、楽園に戻り、自分達の祖先を裏切った天使に取ってかわる。そのために、再度、神の寵愛を受けるため、神に祈りを捧げるようになった。

そういつた宗教観から、天使という存在を自分達の打ち倒すべき生命体と解釈していたため、運悪く地上に降りた天使は虐待を受けることが常だった。

また、天使には言霊を支配する能力があると考えられており、一度、天使と約束をしてしまえば死後に、地上よりも更に下層の不毛の地に転生すると考えられている。

「困ったことになったな・・・」  
少年の祖父は暖炉に薪をくべながら、苦虫を噛み潰すような顔で言う。

「ごめん、じいちゃん・・・俺、天使と約束しちゃった。」  
少年は泣きそうな顔で祖父に答える。

話題にあがってる当の少女は、ものすごい勢いで備蓄用の食糧をむさぼっている。

「しょぼい家ねえ、ワインの一本もないなんて。」  
そう言いながら、鹿の燻製を大口で噛み千切り、麦を発酵させたアルコール濃度の低い酒を流し込む。

少年の家は裕福な家庭ではない。狩人である祖父と少年だけの家庭である。

冬用の備蓄もそろそろ底をつきかけている厳しい少年の家庭の台所事情等おかまいなしで、少女は食料を胃にかきこむ。既に、この食事だけで3日分の食料はやられていた。

「不味い食べ物だけど、空腹は満たしたわ。今度はもつとまもとな物を用意しなさい。レント、命令よ？」

少女は腹をさすりながら、少年に言う。

「まだ、冬は終わっていない。まともな食料なんてあるわけないよ。サーシャ」

と、レントと言われた少年が口を開いた瞬間、レントにサーシャと言われた少女の肘鉄が飛ぶ。

「サーシャ様でしょ？あんだ、自分の立場、分かてるの？奴隷よ、奴隷。」

肘鉄を受けたレントがサーシャを睨み、何か言いかけたところで、レントの祖父が口を挟んだ。

「孫があんだと約束してしまったからには、言うことは聞く。孫をみすみす地獄行きにするわけにもいかんぞ。しかし、あいにく、ウチの家は裕福ではない。それが嫌なら、ワシとしては、出て行ってもらった方がありがたいんだが。」

サーシャは家の中を見渡す。

家は木と石をつなぎあわせ、それを土で塗り固めただけの簡素な掘っ立て小屋で、かなりの老朽化が進んでいる。

そして、つぎはぎだらけのボロ布のような衣服をまとった二人。

「まあ、私も、贅沢は言えない立場みたいね。奴隷は生かさず殺さずってのが

鉄則だし。しばらくは我慢しましょう。」

サーシャがレントに要求したものは、当面の食料と寝床だった。羽は動くものの、まだ、本調子とは言えない。傷が癒えた後、塔の上の大地に戻るのだという。

レントのいる地域では、通例、男は14歳から本格的な狩猟者となる。

レントはまだ12歳であるため、狩りの真似事のような遊びはしたことはあったが、本格的に森や山に入ったことは無かった。

まだ、雪の深い森をレントは弓を持ち獲物を探す。冬の森では、獲物は見つからないだろうが、野草やきのこ程度なら、雪を掘り返せば発見できるかもしれない。運がよければ、ウサギ程度なら仕留めることができるかもしれない。

ただでさえ少ない備蓄が予期せぬ来訪者により、食い荒らされている。

祖父も老体をムチ打って山に入るが、状況は芳しくないようだ。

「ねー、レントー、お腹減ったー」

少女は、中空に浮かび、羽をバサバサとゆっくり動かす。

「お前のために、今、狩りにでかけてるんだろ、この、クソ天使が。」

「サーシャ様って呼びなさいと言ってるでしょ。この、馬鹿レント」  
そういうと、少女は体を一回転させ、レントの頭に勢いのついたかかとを振り落とす。かなりの勢いがついたかかところがレントの脳天を打ち抜いた。

「痛てえ……今に見とけよ。で、サーシャ様、何故に私めのような下賤の者にご同行なされているのですか？」

「あんた一人で狩りなんてできるわけじゃないの。おじいさんの許可ももらってないでしょ？」

また熊に襲われて、死なれたりしても困るからねえ。」  
そう、少女は意地悪そうな顔でニヤリと笑う。

絶対、嘘だ。

サーシャについて、気がついたことがある。

この少女は、暇が非常にキライなようだ。と、いうよりも、じっとできないタチのようだ。小屋の中で暇をもてあますと、思いつきの遊びでレントを虐待する。この間は、落ちた干し肉を手を使わずに口のみで拾って食べると言われた。その様をみて、この少女は腹を抱えて笑っていた。

羽が完治するまでの、暇つぶしなのだろうか、レントは完全におもちゃにされていた。遊び道具が森に入り、手持ち無沙汰になる時間が嫌なんだろうことは、容易に推測できた。

ゆらゆらと空中を漂い、器用に木を避けながらレントについていたサーシャは大きな木を指差した。

「よし、レント、あの木に登りなさい。命令よ。」

秋には果実をつける木だが、この季節、実が残っている訳も無い。

「何で、木に登る必然性があるんだ。そろそろ食料も尽きるんだぞ。」

「私が暇だから。馬鹿と煙は高いところが好きなんでしょ？さあ、登りなさい。」

ああ、理不尽だ。そう思いながらレントは木に登る。この行為に何の意味があるというんだ。

小さいころから森で遊んでいたレントは木登りが不得手というわ

けでもない。十分程の後、木の頂上部分にたどり着く。

ここらあたりで一番高い木だったため、見晴らしがいい。サーシヤはレントの周りを迂回しながら、そのさまをニヤニヤしながら見つめている。

レントがあたりを見回していると、近くの川で鹿の親子が水を飲んでいるところを見つけた。

「おい、サーシヤ、鹿肉食いたくないか？」

「んーキライじゃないけど、そろそろ、干し肉とか燻製は勘弁してもらいたいわね。いい加減、飽きた。」

「あれ、見る。仕留めれば、10日分の食料にはなる。」

レントが鹿の親子を指差す。

「あら、かわいらしい小鹿さんだこと。」

「で、熊から逃げたときにやったみたいに、俺をあそこの近くに運ぶことはできるか？空の上から弓を放てば、多分、仕留められる。」

「私に重労働させるつもり？」

少女はつまらなそうにレントに答える。

「サーシヤに頼んだ俺が馬鹿だったよ。」

「ま、私も久しぶりに新鮮な肉が食べてみたいしね。サービスで木の下までは

運んであげる。感謝なさい。あと、サーシヤ様ときちんと呼びなさい。」

木の下に降りたレントは、川に向かって走っていった。

「働かざるもの、食うべからずってね。」

そうつぶやくと、少女はレントに続いた。

川辺には鹿の姿は無かったが、レントも狩人の孫だ。足跡を発見すると、獲物の追跡に入った。少女の姿はかなり上空に見えた。狩りの現場は彼女にとって暇つぶしの対象とはならなかったのだらう。

つまらなそうに宙を泳いでいる。

レントは疲労につつまれていた。足が雪道にからみ、重く感じる。既に追跡を開始してから6時間は経過している。

レントは細心の注意を払い、獲物を追う。

おい、物音、ささいな事でも獲物は捕食者を察知し、逃亡する。森の中で鹿に気づかれたら、仕留めることは不可能に近い。

「やっと、見つけた。」

鹿は、雪を掘り起こし、その下の草を食んでいた。

レントは親鹿に弓の狙いを定める。その時、風の向きが変わった。レントの臭いが鹿のほうに流れる。親鹿の後、一瞬送れて小鹿が同方向に駆け出す。

レントが弓を構えていることを確認した親鹿が、きびすを返し、逃亡の方向を変えた。狙いのつけやすい障害物がない場所に親鹿が現れたと同時に、

レントの弓が放たれ、親鹿の首に突き刺さり、ドスンという音と共に倒れこんだ。

「子供を、庇ったのか？」

そう、レントがつぶやいた。

「ほんとう、鹿だけに、馬鹿ね。こんなことをしても、子供だけで生きていけるわけないのにね。」

後ろに少女がたっていた。悲しそうな顔をしていた。

透き通るような青い瞳と、ツインテールの金髪、白い羽の少女のその姿に、レントは美しい。と思った。

「うわー、グロイわね、これは。」

サーシャが言った。

鹿を木と縄で宙刷りにし、ナイフで胴体部分に切り込みをいれたレントは鹿の腸を引きずり出していた。

「グロイって言い方はないだろ。これで、俺達は飯食ってるんだ。」  
黙々と少年は解体を行う。

腸と内臓と持ちきれない肉は雪の中にうめておく。天然の冷蔵庫の役割を果たし、2、3日は腐らないだろう。

後日、祖父と共に、回収に来るつもりだ。

「そういえば、天使は、死ねば、どうなるの？」

ナイフを動かしながらレントは尋ねた。

「俺達は、別の時代のこの土地に生まれ変わるってことになってるけど。」

「ほんとうにあんた達の宗教って、馬鹿なくだらない宗教ね。」

天使は、死んだら、光になるのよ。そして、この世界と一体となる。」

どこの御伽噺だよと、思ったが、よくよく考えてみるとサーシャの存在自体が、御伽噺だ。サーシャが光になる姿は、なんとなく、綺麗だろうな、と思った。

作業開始から3時間ほどがかかり、ひと区切りついた。これ以上の解体は、時間的に無理だ。

雪に包まれた森で夜になれば、凍え死ぬ可能性がある。

二人は家路に着いた。

「そういえば、礼を言っ てなかったな。」

レントの口が開いた。夕方になり、気温が急激に下がっている。息が白い。

「んー？なんのことー？」

少女は空中を回転しながら答える。

「鹿、獲物の場所、教えてくれるために、木に登らせたんだろ？」

「勘違いしないでね。アンタの為じゃない。新鮮なお肉がお腹一杯食べたかっただけよ。」

つつけんどんに少女がレントに返した。

「まあ、そういうことだろうとは思ってたけどさ。ほんと、可愛げがねー女だな。」

「少しは口の利き方に気をつけてもらえる？私は、あなたの、ご主人様なんだからね！」

そういうと、サーシャはレントの横っ腹に胴まわし回転蹴りを入れようとする。サーシャの足が宙を蹴り、バランスが崩れる。

空中でのバランスの維持は難しいようで、羽がばたばたと忙しく動く。

「そう、何度も同じような手を食らうか、ばーか！」

「レントのくせに、生意気ね！一度、お仕置きをする必要があるわね！」

そう言い合いながら、じゃれあう二人は笑顔だった。

サーシャがものすごい勢いで鹿肉を平らげる。

初めて解体現場を見たとき、レントはしばらく肉が喉を通らなか



ったが、サーシャにそういう概念は存在しないらしい。ほとんど焼いていないレアな状態の肉を次々に口に放り込み、麦を発酵させた酒で流し込む。

「やっぱ、肉は、レアね、レア。」

そういいながら、サーシャはご満悦の様子だった。

祖父と、レントはそんなサーシャを見ながら苦笑いしていた。

一緒に暮らし始めた当初は、横柄な態度に辟易していた。態度と口は悪かったが、実際には、家事を手伝ったり、革製品の加工を手伝ったり、以外に働き者のようなところもあった。何より、食卓がにぎやかになったことで、新しい家族が増えたようで、祖父は多少の喜びすら感じていた。

天使と人間の宗教的な世界観から生じる軋轢は、別として。

日差しに温かみがおびるようになった。

そろそろ森の雪も溶け出し、春の到来を感じさせる季節。冬眠に入っていた動物も次々に目を覚まし、木々は新芽を噴出す準備を完了していた。

「ところで、サーシャ。羽の具合はどうだい？」

「んー、そろそろ、かな。多分、春になれば、本調子に戻らと思う。いいかげん、こんなカビ臭い小屋には辟易してたところだから、丁度いいわ。」

そんな祖父とサーシャのやりとりを見ながら、レントは少しの寂しさを覚えた。レントの村には、同年代の女の子はいない。同年代の同居者に、ほのかな恋心を抱いていた。

健全な12歳男子の反応だった。

祖父との話がひと段落してことを確認すると、レントは、かねてからの疑問をサーシャにぶつけた。

「そういえば、なんで、羽の調子が悪かったら、帰れないんだ？」

「んー、羽の無い奴には分からないでしょうけど、

結構、ある程度以上の高度では、空気って薄いもんなのよ。

だから、羽が叩きつける空気が軽くなる。

要するに、羽の回転数をあげないと、飛べなくなるのよ。」

説明がよく分からなかったが、適当にレントは相槌を打った。

「それで、回転数をあげると、体に無理が生じるの。」

紫の斑点が出たり、血が噴出したりね。

高いところに大地はあるから、途中でやっぱり辞めた。とかそういうことはできない。

辞めたら落下するしかないからね。」

「ふーん、お前も苦労してるんだな。」

「お前じゃなくて、サーシャ様よ。この馬鹿レント。」

レントは拳骨を食らった。

行商人の一団が村に到着していた。

冬の物流はほとんどないため、多少レントが割高だが、行商人が現れた際には村の広場には賑わう。

レントと祖父は先日仕留めた鹿の毛皮と交換で、当面の生活物資を得ようと

広場に向かっている際に、村には似合わない、黒いコートを着込ん

だ男が立っていた。男は腰に長剣を刺し、弓を背中にかけていた。

「失礼、ご老体。」

「何かようですか？」

「先日、このあたりに、天使が出没するという狩人からの情報がありましたね。何かお心当たりがあれば、情報を提供していただきたい。無論、それなりの報酬は支払いますが。」

きた、とレントは思った。

天使は、数年間は遊んで暮らせるほどの高値で市場に卸す事ができるほどに価値が高い。レントと祖父以外の誰かに見つければ、こうなるのは道理だった。

サーシャの姿は良く目立つ。レントの家が村から外れているため、村民との接触を避けることはできていたが、いつまでも隠し通せるものでもない。

レントが狩りに行く際、他の狩人に姿を目撃されたのだろう。捕獲の暁には、情報量だけで、提供者にはそれなりの額が支払われるはずだ。

「天使？はてさて、そのような噂を聞いたこともありませんが。祖父はとぼけているが、顔が引きつっている。」

「そうですね、できるだけ手荒な真似はしなくなかったのですが、強制的に協力していただきましょうか。」

男は祖父の手をひねり上げ、後ろに回った。完全に関節が極まっている。

「な、何をなさるんですかな？」

「ご老体。あなたの家で天使をかくまっている事は先刻承知なので

すよ。

「こちらも生活がかかってましてね。・・・ぶち殺すぞこのジジイが。」

「じつちゃんに何すんだ、この野郎！」

レントは男に殴りかかるが、男の蹴りで吹き飛ばされ、気を失った。

「さあ、家まで案内してもらいましょうか。」

レントは、通りかかった中年の男性に起こされた。祖父と男は既に、その場にはいない。

起き上がると、中年の男への礼もそこそこに、家に向かって走った。

頭の中を妄想がかける。

昔、聞いたことがある。

掴まった天使の顛末を。

大体のパターンは金持ちの玩具にされ、さんざんもてあそびつくした後、性的興味を失った金持ちは、天使の虐待を始める。

生きたまま、手足を少しずつもぎとられ、食われる。

クラッチ教の伝承を曲解した民間伝承だが、天使の肉を食すると、寿命が大幅に伸びるらしい。

「嫌だ。」

レントは走る。

短い期間ではあるが、口は悪いがあいつは悪い奴じゃない。

「嫌だ。」

レントは走る。

いつのころからか、レントはサーシャを意識している。  
彼女のが好きだった。

他の男に、いいようにされるなど、考えただけで、寝覚めが悪い。  
ましてや、生きたまま食われるなどと。

家に着いたとき、レントの眼前には酷い光景が広がっていた。

祖父はさるぐつわをかまされ、後ろで縛られ床に転がっていた。

サーシャが、服を剥ぎ取られ、裸体をさらしていた。

首に輪がまかれ、輪には鎖がつながっている。

腕と足を縄で拘束され、2翼の羽も縄で縛られていた。

サーシャは泣いていた。

頭の中が真っ白になり、護身用のナイフを両手でもち、男に突進する。

「これから、市場に引き渡す前に味見をしようと思ったところなんだがな、せっかちなガキだ。」

そういうと、男は腰の長剣を抜く。

長剣が、レントの腹を貫く。

致命傷だ。

「勝った。」と男が思ったとき。腹を貫かれたままレントは更に前進する。

男の顔が驚愕にまみれたとき、レントの右手が動き、護身用のナ

イフが男の首を薙いだ。

ナイフは動脈をねこそぎもっていった。

こちらも、致命傷。

血が盛大にお互いの体から吹き出る。

レントは最初から、勝つ事は考えていない。  
相打ちのみを狙っていた。

縄から抜け出した祖父は、レントの手当てをしようとしたが、傷口をみて、残念そうに首を振り、レントの首にナイフをあてる。

「ちょっと、おじいさん、何をする気？」

裸体を毛布でつつんだサーシャが叫んだ。

「この傷じゃあ、助からん。せめて、楽に殺してやるのが、優しいんだよ。」

「ちょっと待って！」

ん？と、祖父がサーシャを見る。

「私が、助ける！」

天使の住まう土地には、どんな傷も完治させる草がいたるところに生えている。神の祝福から見放されていないその土地では、ただの、雑草にすら、そのような効力がある。

「サーシャ、その話が本当としても、塔の上では時間的に無理じゃ

ないのか？

レントは、すぐに死ぬ。」

「できるだけ急ぐ。おじいさんは、何とか、レントを持たせて！」

少女は空に向かって飛び立ち、大空を両の翼で駆けた。

少女は、羽を広げた。

向かう先は天高くそびえる塔。

塔はなめらかなフォルムで、

掴まるような突起物はない。

塔の先は見えない。

雲ひとつ無い空に、塔は一筋に伸びていく。

少女は飛びたつ。空の彼方へ。

青空にどこまでも続く、塔の先、その先へ。

少女は上昇を重ねる。

既に地上へは数百メートルを数えるだろうか。

もう、後戻りはできない。

後は、体力が無くなるか、塔の先まで上昇するか。

それだけだった。

既に何十分上昇を続けているか分からない。全力で動く羽が重い。肺が酸素を全力で取り込むが、需要量に供給量が追いついていない。

全身の筋肉が悲鳴を上げる。

少女は手を見つめる。白い透き通っているはずの肌に淡い紫色の斑点が広がる。限界が、近い。

肺の一部の血管が破裂し、気管を通し、血が口に広がる。

少女は上昇を続ける。急激な気圧の変化にも体はついていけない。だるさ、痛み、眩暈。

「あの、馬鹿、奴隷のくせに。」

少女は思う。

「あの馬鹿、奴隷のくせに。命令もしてないのに、なんで、体を張っちゃうかな？」

少女は思う。

「あの馬鹿、レントのくせに、なんで、ちょっとかつこいいこと、しちゃうかな。」

全部、全部、私のせいなのに。あの男に素直に私を引き渡してたら、

死ぬことはなかったのに。」

少女は叫んだ。

「レントは、私が、死なせない。」

少女はなおも上昇を続ける。

空気を切り裂く弾丸のように。

意識が飛びかけたとき、眼前に何かの塊が見えた。塔の上に位置する。天使の大地だった。

レントはベッドの上で目を覚ました。祖父の顔が見える。

自分は死んだはずじゃ……とねぼけ眼でぼんやり考えている時、部屋の一室の隅が、ぼんやりと光っていた。



サーシャは光を放っていた。

無数の淡く輝く小さく丸い光がサーシャの右足と、右の羽の断面から、湧き上がっていた。サーシャの片方の翼と、右足の半ばほどが既に光に変換されていた。

「天使って死んだら、どうなるの？俺達は、別の時代のこの土地に生まれ変わるってことになってるけど。」

「多分、転生とかはないと思うけど。ほんとうに馬鹿なくだらしない宗教ね。」

天使は、死んだら、光になるのよ。そして、この世界と一体となる。」

サーシャとそんな話をしていたことを思い出した。

体の半分ほどがなくなった天使が口を開く。

「レント・・・良かった。」

「わけわかんないよ。なんで、俺が生きてて、お前が死んでるんだよ。」

「まあ、説明はおじいさんから、聞いて。」

「なあ、いきなり、消えてなくなるとか、酷くないか？」

俺は、俺は・・・お前が、好きなんだよ。」

一瞬、サーシャが目を点にしたが、かすかにほほえみ、言った。

「お前じゃなくて、サーシャって、ちゃんと名前で呼びなさい？」

ぶわつと光の粒子がふきあがったかと思うと、光に一面が包まれ、サーシャは消えていた。

レントは14歳になり、正式に狩人として認められた。

いまだに、大物を仕留めた事は無いが、多少は家計の役に立つ程度の稼ぎは得ていた。

見晴らしの良い高台で、木の切り株に腰かけ、地平の向こうに、垂直に見える線を見る。

少し、涙を流し、何かを考えていたようだが、気を取り直し、立ち上がる。

ポトっという音と共に、レントの目の前に、りんごが落ちてきた。

「さあ、レント、拾って食べなさい。命令よ。」

レントが見上げると、金髪のツインテール。白い羽。青色の目に白い肌の少女が宙に浮いていた。

「ちよつ、お前！」

「天使が死ぬと、すぐに生まれ変わるのよ。2年かかったけどね。」

「あと、お前じゃなくて、サーシャってちゃんと名前を呼びなさい。馬鹿レント」

そういうと、サーシャは体を回転させ、勢いをつけると、水平に飛んできた。

シャイニングウィザード、光り輝く魔術師。少女がそう名づけている技は、ただの、高速とび蹴りだった。もろに顔面に蹴りを受け、

後ろに綺麗に倒れた。

後ろに倒れ、サーシャを見上げる格好。下からレントは少女を見上げる。やはり、この少女が空を飛ぶさまは美しい。

「あとね、あんた、私の事好きっていつてたけど、私があんたを助けたからって勘違いするんじゃないわよ？」

そういえば、サーシャが消える前に、世迷言を口走ったような気がした。

「ま、あの時、助けてくれたときは、少しかっこよかったから、奴隷から、少しは昇格させてあげてもいいけどね。」

サーシャは中空を舞いながら、笑顔でそう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6114o/>

---

FLY

2010年10月31日08時35分発行